

# 『行人』における一郎の懷疑

越智悦子

(一)

『行人』の主人公一郎は、美的にも、智的にも、乃至は倫理的にも、非常に進んだ鋭敏な人物として登場している。そうした彼は、自らが努力と工夫とによって養い上げた「高い水準」に周囲の人々を照らし合わせては、そこに虚偽を見出し出して憎悪を感じ、自分が理想としている程の誠実さ、純粹さを求めながら常に期待を裏切られ、絶望して孤独の内へと沈んで行く。

一郎を孤独へと追いやる人々の中にあつて「最も親しかるべき筈の人」として一郎に目され、求められているのが、その妻お直である。ところが、その妻が一郎にとつては最も「偽の器」と見え、最も信じがたい存在として映っているのである。

一郎は、自分は「霊も魂も 所謂スピリットも攫まな女と結婚してゐる」「己は妻を何うしても信じる事ができない。」と言う。しかし、この一部の懷疑には、はっきりとした対象がある訳ではない。ただ漠然と、自分は

自分の妻を信じられない、自分は妻のスピリットを攫んでいない、と思ひ込み苦惱しているのである。

そこで、この稿では、この苦惱の根源となつてゐる懷疑はどこから生じて来るのか、そして、一郎がこの懷疑を晴らす事もなく、苦惱と絶望の底に沈んで行かざるを得ない原因はどこにあるのか、を探つてみたい。

(二)

一郎のお直に対する懷疑の原因は、いくつか挙げる事ができる。

まず第一には、一郎と直の性格の相違がある。一郎は「事件の断面を驚く許り鮮かに覚えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた。」それでいて、一郎は一向平氣であつた。しかし、お直にとつては場所や年月を伴わない、ただの断面でしかない一郎の記憶は、つまらないものであつた。一郎と直とは「こんな所でよく喰ひ違ひ、それが「少しの具合で事が面倒になる例

も稀ではなかつた。」のである。

第二には、一郎と直との性格の類似がある。お直は第二郎の見解によると「決して温かい女ではなかつた。けれど、も相手から熱を与へると、温め得る女であつた。」そして、この同じ気質を一郎自身も持っており、熱を与える側には立てない男だったのである。「従つて同じ型に出来上つた此夫婦は、己の要するものを、要する事の出来ないお互に對して、初手から求め合つてゐて、未だにしつくり反が合はずに居る」という状態に置かれて居るのである。

第三には、お直の性格が挙げられる。お直は、もともと「無口な性質」で、愛嬌のある方ではない。その上「男子さへ超越する事の出来ないあるものを嫁に來た其日から既に超越し」た自由な女でありながら、外面はあくまでも静かで「凡てを胸のうちに畳み込んで、容易に己を露出しない」「落付」「品置」「寡黙」は誰の目にも、しっかりし過ぎた「驚くべく図々しいもの」と見えた。そして、二郎の目には「彼女は初めから運命なら畏れないといふ宗教心を、自分一人で持つて生れた女らしかつた。其代り他の運命も畏れないといふ性質にも見え」る。「測るべからざる女性の強さ」を持つた女として登場しているのである。

第四には、一郎自身の性格が挙げられる。一郎は「天賦の能力」を持ち、「高い教養の工夫」によつて鋭くなつた眼を持つ「頭腦明晰」な学者であり、大学教授として最高の知識人である。すぐれた学者として、研究する<sup>11</sup>という事を本領として來た彼は、全ての事を断面的に、知的に分析して、そこに何らかの意味を見出さずには居られない。こうした彼は、自分の妻に對しても、その心を研究しなければ居ても立っても居られなくなつて居る。即ち、一郎は「多知多解」に自らを縛られ、身動き出来なくなつて居る近代知識人として登場して居るのである。

従來は、この一郎の性格に焦点を当てて、「行人」が解明されて來た。それ故に当然、一郎のお直に對する懷疑も、「一郎夫婦の間にある深淵は、むしろ一郎自身の存在の根源にある深淵であり、性格の悲劇とすれば一郎自身の悲劇といつてよいものである。」（瀬沼茂樹『夏目漱石』<sup>P233</sup>）と、その原因が、一郎の知性への過度の信頼と、近代知識人としての非実行的、非生活的な姿に置かれ、「知性の悲劇」として説明されて來た。

しかし、一郎の直に對する懷疑は、一郎が近代知識人であるが故に、その知力の故に、起こつて來るものであ

るうか。私には、それよりも、もっと根本的なものとして、もっと泥臭い所に存在している一つの観念が、大きく作用している様に思われてならない。その根本的な観念とは、夫としての一郎は、お直を一人の女、一人の独立した人間としては見る事ができず、自分の妻という目で見えていないという事、即ち、妻という立場にある人間の地位を、真の近代個人主義思想に則って確立してはいない、という事である。

この一郎の根底に存在している観念、その特質について、一郎の、友人Hさんに対する態度と、妻お直に対するものとの対比を通して考えてみたい。

### (三)

一郎の、Hさんに対する対し方、Hさんの言行を如何に解釈して捉えているか、その捉え方、またHさんを理解しようとする彼の姿勢等々は、お直に対するそれらとは大変に違ったものである。

まず、一郎のHさんに対する態度から見て行くと、一郎はHさんが自分の心を何にも囚われずに、自然のままに出している姿を見ると有難いと思う。そして、それをHさんに、「君の損も得も要らない、善も悪も考へない、たゞ天然の儘の心を天然の儘顔に出してゐるのに出食は

すと、僕は好い影響を受けて、一時的にせよ、苦しい不安を免かれ、激した心の調子が収まるのだ」と説明する。そうして実際に、Hさんのそうした姿の前には、「手を突き」「恰も謝罪でもする時のやうに頭を下げ」涙まで流してはばからない。この「天然の儘の心を天然の儘顔に出してゐる」というのは、第二郎の友人である三沢を慕ったという精神病の娘さんに対する一郎の感想の中では、「世間の手前」とか「義理」とかを忘れてしまった姿、と言っているものに相当していると思われる。

これをお直の上に移して考えてみると、お直にはこうした天然自然の姿が見られないのか、というとお直という女は見方によれば、「何ものにも囚はれない自由な女」であり、二郎の目からは、「彼女の今までの行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎない」と見得る女なのである。ところが、お直の「天真の発現」は、夫一郎の目には決して「天真の発現」とは映らない。それらは全て、不条理なものとして、「偽の技巧」に見えてしまうのである。この一郎の、お直に対する偏見が、どこから生まれて来るのかを考えてみると、それは、一郎がお直を一人の女として、一個の独立した他人として見ているのではなく、あくまでも自分の妻としてしか見られない所から生じて来るのではないか、と思われる。

次に、一郎とHさんとの人間関係について見てみると、Hさんと言えども、一郎の鋭敏さ、そこから引き出された彼の「高い水準」に付いて行けない事があった。二人は一郎の精神を静めるために旅に出る。その旅の途中で突然に、一郎から「君の心と僕の心とは一体何處迄通じてゐて、何處から離れてゐるのだらう」と聞き糺されたHさんは、問題を面倒にしたくない、という気持ちもあって、人間相互の理解の困難さを、「Keine Brücke

Führt von Mensch zu Mensch（人から人へ掛け渡す橋はない）」というドイツの諺を使って簡単に片付けたしまった。それに対して一郎は、「自分に誠実でないものは、決して他人に誠実であり得ない。君は僕のお守になつて、わざ／＼一所に旅行してゐるんぢやないか。

僕は君の好意を感謝する。けれども左右いふ動機から出る君の言動は、誠を装ふ偽りに過ぎないと思ふ。朋友としての僕は君から離れる丈だ。」と言って、Hさんの言葉から鋭く感じ取った「作り物」の要素を指摘し、不快を投げつけて、Hさんを一人山へ置いたまま、一人でさっさと馳け下りてしまふ。

また、Hさんが一郎の煩悶を何とか軽くしてやろうという心遣いから、自分には必要としない、それ故に当然知りもしない「神」という言葉を使って我を投げ出す事

を説いた時にも、一郎はその鋭利な頭で「君のいふ事は、全く僕の為に拵へた説教で、君自身に実行する經典ぢやないのだらう」と、Hさんの虚構を見ぬいて非難する。

行き掛り上、Hさんが「拵へものではない自説だ」と主張すると、一郎は、いきなりHさんの横面をびしゃりと打った。そして、むっとしたHさんに向つて、その心の動搖を指摘し、Hさん自身が我を投げ出し切れてはいない事を証明して見せる。一郎にとつては、たとえ動機が何であれ、またその目的が、どんなに善の心から出たものであつたにしろ、その言行がその人自身の自然から出たものではなく、目的のために使われた手段である時には、それは「拵へもの」であり、「偽り」でしかなくなつたのである。

この様に、Hさんは旅へ出てから、絶えず一郎の気に障る様な事を言つたり、したりしている。横面を打たれてさえている。しかし、それにもかかわらず、Hさんには「まだ一郎から愛想を盡かされてはゐない」という自信があつた。実際に、一郎はHさんと言ひ争いをしながら、また時には衝突して気まずい雰囲気二人に陥りながらも、なおHさんを「重厚な落ち付いた実行的な人」として尊敬し、その前に頭を垂れて自分の不安を訴えている。一郎はHさんの前では、高い自分も、弱い自分も、また

鋭利な自分も、悩める自分も、すべての自分を赤裸々に投げ出して見せる事ができる。即ち、自分を出し切つて、ぶつがって行く事ができるのである。もちろん、ぶつかわれるHさんの方にしても、「一種の弱点を持った」一郎を、その正直さ、聡明さ、誠実さ、理智の高さ等々において、常に衷心から敬愛している。この二人の間にある親しい関係を、Hさんの言葉を借りて言えば、一郎とHさんとは「和して納まるべき特性をどこか相互に分担して前へ進める」関係にあると言える。

ところが、一郎は妻であるお直とは「和して前へ進む事」ができない。一郎はお直の前では、自分をさらけ出して見せる事などはしない。お互いに自分を出さない夫婦が、「和して納まるべき特性を相互に分担」する事など、できるはずがないのである。そこには二人の性格も原因していよう。しかし、ここでは、一郎の「妻」というものに対する意識に注目したいのである。

#### 四

明治の新しい時代を担っている大学教授である一郎は、その時代の最も新しい知識と学問とを豊富に持った知識人でもある。それ故に、当然新しく西洋から入つて来た個人主義思想を理解しており、この思想に基づく個人の

自由と平等とは、一郎の高い理想の中で相当の位置を占めていたはずである。ところが一方、実生活においては、一郎は古い家族制度の家長権を固執し続けている、昔堅気の父親によって、「長男に最上の権力を塗り付ける様にして育て上げ」られ、母親には、長男という事で甘やかされて、我儘いっぱいに育つた人間だったのである。

ここに一郎の矛盾が生じて来る原因があると思われる。即ち、一郎自身が努力と工夫とによって頭に培つて来た思想、見識、観念と、生まれてこの方、生身の一郎が生活の中で身に付けて来たものが融け合わないのである。

新しい知識人としての一郎は、お直を一人の女として、彼女のスピリットを摸みたいと熱望している。ところが、その「スピリットを摸む」という事を成就するために必要な、「相手を独立した一個の人格として認めて、共に納まるべき特性を相互に分担して前へ進む」という過程を、旧い長男としての一郎は取り得ない。旧い一郎は妻を断面的にとらえては、自分の理想に合わぬ、自分の思う通りに動かぬ、不可解だ、と批判し、疑っているに留まっている。

新しい一郎は、自分の妻の存在を、封建秩序下における夫の様に、家長である自分の所有物、もしくは付属品として無視する事はとうていできない。自分に最も親し

い存在として求めている。が、それと同時に、新しい一郎の背後に根強く控えている旧い一郎は、妻というものを、完全に自分から離れて独立している一個の人格としては認められない。即ち、Hさんに対して抱いているのと同様の、自分と対等な個人に対する敬愛と信頼とを持って、自分を投げ出して見せるに値する相手とは考えられないのである。この旧い一郎は、お貞さんの結婚について、彼が言及した所にも色濃く現われている。

一郎はお貞さんを、「宅中で一番欲の寡ない善良な人間だ」「幸福に生れて来た人間だ」と見なしている。そしてHさんに向かって「君を女にしたやうなものだ」とまて言う。そこで自分と比較されたHさんは、「君は其のお貞さんとかいふ人と、一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」と一郎に尋ねる。それは、かつて一郎がHさんに、「何にも拘泥してゐない自然の顔を見ると感謝したくなる程嬉しい」と明言した事があるからで、それは言い換えれば、「自分が幸福に生れた以上、他を幸福にする事も出来る」「幸福に生れて来た人を見てゐると、自分の心も落ち付いて幸福になれる」という事を意味していたからである。だが、それに対して一郎は、次の様な説明によって否定する。

君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思つて

ゐるのか。(中略)嫁に行く前のお貞さんと、嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の為にスポイルされて仕舞つてゐる。(中略)何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ。

故に、たとえHさんが女になつた様な人物であつても、その人が結婚する前ならばともかく、結婚した後の女、即ち妻となつた人間からは、今Hさんの前で一郎が心を静める事ができ、幸福でいられるのと同様の影響を受ける事はできない、と云うのである。一郎は女は結婚すると、元的一个の人間であつた女から、夫に左右される人間になり下るものだ。妻となつた女は、夫から影響を受けないではいられない。そして、それは天真を失う事と人間の品位の墮落とを解っている、と考へている。しかし、結婚して妻となつた女が実際に、夫のためにその人間性を邪にされ、その品位を墮落させられるものであろうか。女が結婚するという事は、一人の男と「夫婦関係」という人間関係を結ぶ事である。故に、当然それまでな

かった制約を、夫である相手から受ける事には間違いない。しかし、その制約は、夫婦関係という人間関係を維持して行くためのものであって、それがその女自身の人間としての天真、品位に影響するものではなからう。

夫によって多少の影響はあるにしても、一人の女そのものは変わらないはずである。ただ、そこには一人の男と「夫婦関係」を結んだという人間関係の変化があるだけである。それ故に、この夫としての一郎の考え方、感じ方は、対象となつてゐる結婚をした女自身に変化が起るために生ずるのではなくて、それを（結婚した女を）見ている一郎の見方そのものに、人間関係の変化から生ずる偏見、夫としてのエゴが生まれてゐるのである。要するに、一郎自身が結婚した女を、即ち自分の妻を、結婚前の一人の女と同様には見られないのである。

もう一度くり返して言えば、一郎は一人の独立した「女」とは自分自身が見得なくなつてゐる女、即ち「妻」としてしか見られない女から、一個の独立した「女」としての彼女のスピリットを攫みたい、と苦悶してゐるのである。ここに一郎の矛盾がある。

#### (五)

この一郎の矛盾は、彼の個人主義思想が生活の中に根

を降してゐない、生活から切り離された観念でしかない事を証明してゐる。ヨーロッパにおいて確立した個人主義思想の様に、長い歴史の中で、生活に根ざした、生活の中から生まれ出た思想ではなかつたのである。真にヨーロッパ風の個人主義思想を獲得した夫婦であつたならば、彼らは各自の自我を出し合つて対立し、対等に自己を主張し合うはずである。そして、それが合致できぬ方向へと進んで行かざるを得ない二人なのであれば、その終極において協議離婚の成立、その他の何らかの解決がなされるであらう。しかし、一郎と直とは、互いの自我を外に出し合つて、フランクに闘う事などできない。それを成し得る生活の基盤を持っていないからである。背景として封建的な、旧態依然の生活を持つてゐる以上、この二人は思想の上にもまた、意識、無意識の内に封建思想の尾を引きずつてゐる。生活を越えた観念の場では、西洋流の新しい個人主義思想を理解し、傾倒してはいても、生活と観念とが食い違つてゐるために、解決の方向がつかめないという状態に陥つてゐるのである。

ここで二人と書いたのは、今まで見て来た一郎だけではなく、お直の中にもその食い違ひが見られるからである。「行人」が一郎を中心に書かれてゐる以上、お直については、二郎の目を通して見たお直の姿を、いくぶ

んか捉えられるだけに留まっていた。しかし、それだけを拾い出しても、お直は決して旧い女ではない。彼女は性格的には、「始めからあるものを超越した、何物にも囚はれない自由な女」であって、二郎に向つてならば、

「妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたい」とまで大胆な事を言い、自分は「何時でも覚悟が出来てゐる」と言い切れる女である。自分の死を自分で何時でも覚悟していられる、という事は、自分の中に自分自身で、自己という主体性をはつきりと攫んでいる、という事であろう。それ故に、お直は自己を殺してまで夫一郎に近寄ろう、一郎の機嫌の直るように仕向けようとはしない。

しかし、そうかといって、妻としての直は一郎を「夫」としてしか見ていない。一郎を一人の人間として、彼の前に妻としてではなく、一人の人間（女）として自分を開いて見せる事もしない。一郎（夫）に打たれても、抵抗もせず、言い争いもしないで、じつと耐え、封建時代の妻さながらの姿を見せている。そして、自分は長野家へ長男一郎の嫁として嫁いで来た時から、「丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもので」、女はそこから離れて自由に飛んで行く事はできない。「一遍植られた

が最後、とても動く事はできない。立枯になるまで癡としてゐるより外に仕方がない。」「いくら何うしたつて為るやうに為るより外に道はないんだから。さう思つて諦めてゐれば夫迄よ。」と考えているのである。この様に、お直の中にも自己自身の思想、意識と、実生活の中での意識との二重構造から来る食い違ひが見られる。

一郎は、お直が「抵抗して呉れたらいい。せめて言い争つて呉れたら」と願っている。また、彼の「女も氣狂ひにして見なくつちや、本体は到底解らないものかな」という嘆息の中には、旧い日本流の考えから出て来る「世間の手前」とか「義理」とかを全て除いてしまつて、新しい西洋流の個人（自我）と個人（自我）とをぶつけ合いたい、という願望がある。にもかかわらず、生身の一郎は妻の自我を、一個の独立した個人から生まれる、自分の自我と対等なものとは捉えられない。またお直も、自我を表に出して、夫に直にぶつかろうとはしない。

自我と自我とのぶつかり合ひはあつても、相手を一個の人格として認める基盤があれば、そこに同時に、互いの尊重があるはずである。そうした、一郎とHさんとの間に見られた様な、尊重し合われた、本当の自己主張のぶつかり合ひがあつてこそ、初めて一人前の人間とおしとしての信頼感も生まれて来るであろう。そして、真の

個人主義思想に則った夫婦の信頼関係というものは、畢竟その独立した人間どうしとしての信頼関係の上に築き上げられるべきものである。一郎と直には、それが無い。表面には自我を出さずに、自我のぶつかり合いをする事なしに、裏面ではそれぞれが、心の奥底で自我に固執し、中心に自分を据えたまま、自我をはり合っているのである。

## 六

明治という時代は、西洋から怒濤の如く押し寄せて来た近代文明の波に飲み込まれ、流されて行った時代であった。その近代文明を思想的に支えているのが、ヨーロッパ個人主義思想であろう。この近代文明と共に、当然日本に入ってきた個人主義思想は、それまで封建思想によって抑圧され、意識の底へと沈められていた日本人の自我を覚醒させ、自我というものを、即ち自己を独立した一つの主体性を持った個人である、と捉える意識を浮上させた。そして、それを最も早く成し遂げたのが、新しい思想を受け入れる下地を持ち、かつ新しい思想を、思想として入手するチャンスをも多く持っていた知識階級の人々であった。しかし、漱石自身の言葉を借りるなら、**「外発的」**に、にわかになから与えられたこの個人主義

思想は、日本の歴史と、深い伝統と習慣に根を降ろしている実生活からは切り離された、観念としての個人主義思想にすぎなかったのであって、それは生活に根ざさない、故に実用される事のない、さらに言えば、実用不可能な思想でしかなかったのである。

この観念としての西洋流の個人主義思想と、生活の中にしみ込んでいた日本流の封建的思想との葛藤、この矛盾する二つの思想を同時に持つ意識の二重構造が、自身ではうまく説明のつかない焦燥、不安、懷疑等々を生み出す原因となっているのではないだろうか。

そして、今まで述べて来た様に、**「行人」**の主人公一郎の、妻お直に対する懷疑の大きな一因も、この二つの矛盾する意識の二重構造にあるのではないかと思われるのである。

この**「行人」**に表われた明治時代の個人主義思想が、真に生活に根ざした、実際のなものではあり得ていないという現象は現代にもあてはまる部分を持っている。現代は、**「行人」**の背景となっている明治末の時代よりは、確かに、より進んだというか、明確に確立された個人主義思想の下に暮らしている。現に、**「家」**を中心とした家族制度は壊され、核家族化が進み、ニューファミリーの時代と言われている。また、女性も世間に出て働く機

会が多くなり、女性に経済力が付いて来ただけ、男女の平等もより実地的な平等へと進みつつある。

しかし、私には我々が日本人である限り、心の奥底の自分自身にさえ意識できない世界も含めて、根本的には、真の個人主義思想の持ち主になり切る事、即ち個人主義思想に則って、自分も他人も、一人一人が全く独立した個人である、という前提に立って生き、生活して行く事は不可能ではないかと思われる。日本は、隣接した外国を持たない、四方を海で囲まれた島国の中に、日本民族という一民族が、日本語という一言語だけを用以て生活している、世界にも他に例を見ない国である。それ故に、この特殊性を象徴する様に、日本語は、**「点の論理」**  
(外山滋比古『日本語の論理』)を持つ言語であり、その生活はお互いが思いやり合い、察し合うという事を基盤にして営まれている。そして、そこから人々は、「人間どうしは互いに理解し合えるものだ」という意識を持っている。この日本的な意識に比べて、西洋では条件がまるで違っており、「人間どうしは決して理解し合えるものではない」という意識を前提にして、個人主義思想が発達しているのである。

故に、こうした人間関係に対する意識の全く異った西洋で生み出され、その生活の中で発展せられて来た個人

主義思想は、互いの察し合いを求め、甘え合って暮らしている日本の生活には、とうてい真に根を降ろす事はできないものであって、日本人の心の底を流れる伝統的な意識とは融け合わず、現代の日本人の中にも、依然として、この意識の二重構造は存在している。そして、そこから生ずる問題は、明治時代から尾を引く現代の我々の問題でもあると思われる。

## (七)

以上述べて来た様に、真のヨーロッパ個人主義思想が、日本に根を降ろす事が出来ないとするならば、即ち真の個人主義思想に裏打ちされた**「夫婦関係」**というものが望めないとするならば、一郎の妻お直に対する懷疑はどの様に解決されれば良いのであろうか。『行人』以後の作品で、漱石がこの問題を如何に扱っているかに、ざっと目を通す事によって、漱石が作品の中で目指した解決の方向性を見ておきたい。

『行人』に続いて、朝日新聞に連載された小説は『心』である。『心』は夫婦関係をその中心テーマとした作品ではなく、主人公の先生の妻である**「奥さん」**はむしろ、ないがしろにされている。先生は奥さんを疑ってはいないが、一郎の様に全身をあげて求めてもいない。先生

の中では、自分自身に対する問題こそが最大の問題なのであって、自分の内部の事だけにとらわれている。これは、一郎の内部だけを延長・発展させたものであって、自分自身のエゴだけに注目し、苦悩し、行動している。

故に、その自分のエゴを発見させる契機となった奥さんについては、先生は、「私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて置きたいのが私の唯一の希望なのです」と言い、奥さんには「何も知らせずに死んで行く。この先生の遺書からわかる様に、先生と奥さんとの間には一郎とお直に見られた様な対立はない。しかし、ある時奥さんがもらした「男の心と女の心とは何うしてもびつたり一つにはなれないものだらうか」という嘆息に象徴される様に、この先生夫婦ではない、根本的には「和して前へ進」んでいる夫婦ではない。先生は奥さんを愛していた。そして「奥さんの幸福を破壊する前に、先づ自分の生命を破壊して仕舞つた。」しかし、ここで奥さんは、夫によって憐れまれ、庇われてはいるけれど、結局何も知らされないまま、後に置き去りにされているのである。この夫としての先生は、自分の中だけにとじこもり、自分のためだけに死を選び、自分一人だけで死んで行ったのであって、そこには夫婦関係における何ら

の解決も示されてはいない。

『硝子戸の中』を間にはさんで、次に発表されたのは、自伝的小説『道草』である。漱石はこの作品で、一郎とお直夫婦を発展させたとも言える、健三とお佐の冷め切った夫婦関係を描いて見せる。健三夫婦は、一郎夫婦よりもさらに強く、それぞれの我に固執している。そして一郎夫婦よりも、はるかにフランクに我を出し合って対立している。だが、そのフランクに出された「我」は、単なる我執であって、相互の理解を求める自己表現・自己主張にはなっていない。その対立の背後にあるものは、互いを非難する気持ちばかりで、互いを認め合った敬愛など少しもない。そして、この夫婦の対立は、健三の最後の言葉、「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」に、くり返されている様に、いつまでたっても、どこまで行っても、「片付かない」ものの一つとして諦められている。故に、ここでも何らの解決の方向性をも見出されないまま、「片付かない」、継続中のものとして、夫婦関係という人間関係の、対立が提示されているだけである。

『道草』に続いて発表された『明暗』は漱石の絶筆であり、その死によって第百八十八回で未完に終わっている。『明暗』は、一郎夫婦、健三夫婦を描いて来た漱石が、

津田由雄、お延の夫婦関係にさらに鋭いメスを入れ、それぞれのお執を剔抉して見せた作品である。ところが残念な事には、死によって作品が中断されたために、最終的に漱石が、この夫婦関係に如何なる結末を想定していたかは、わからない。我々は遺された部分から、推測するに留まっている。その遺された部分における津田とお延の夫婦関係は、作者がそれぞれの立場に立って自我に固執するという書き方がされている。津田は、妻お延の全てを、自分の我に染まった目で偏見し、評価する。またお延はお延で、自分の我を技巧と力とで張り通そうとしている。こうした「愛の戦争」とも呼ばれる夫婦生活の中で、夫としての津田が妻延子を見る目と、自分を捨てた昔の恋人清子を見る目には大きな差がある。この差の最も大きな要因は、津田のお延に対する「警戒心」と、清子に対する「信」との差であると思われる。

それでは、津田が実際には清子に裏切られていながら、それでもなを彼女に信を置いているのはなぜだろうか。この津田の「反逆者清子」に対する「信」はどこから生まれて来るのかを考えてみると、清子自身が疑われる何ものも持たない人間だからだ、と言える。清子は常に微笑をたたえた、余裕を持った人物として登場している。彼女の生き方は、「だつてそりや仕方がないわ。疑つた

のは事実ですもの。其事実を白状したのも事実ですもの。いくら謝まつたつて何うしたつて事実を取り消す訳には行かないんですもの。」とか、「心理作用なんて六づかしいものは私にも解らないわ。たゞ昨日はあゝで、今朝は斯うなの。それ丈よ」等々の言葉からもわかる様に、事実を事実としてそのまま素直に認め、自己の我に囚われる事もなく、自然のままに生きるといった生き方である。清子は言うなれば、人間の自我を超克した理想的人物であり、更に言えば、漱石が最終的に希求した、「私を去り、天に則つて生きる」事を実現している人物なのである。

夫婦関係を中心にして、『行人』『道草』『明暗』と、様々な人間関係を追求して来た漱石は、それら人間どうしの「関係」を分析追求して行くだけでは、どうしても解決できない人間相互の「信頼」の問題を、その終局において、個人個人が「自我を超克する」という方向に求めたのではないだろうか。そうして、その自我を超克した人間の姿を、清子の中に具現して見せている様に思われる。

この自我を超克した人間関係の中における「信頼」というものは、それを支える「自我超克」そのものが畢竟非現実的なものであるのと同様に、常識的・实际的な知

性では説明の付かない夢の様なものであって、それは漱石初期のロマン的作品『趣味の遺伝』における、小野田博士の妹（郵便局で逢った女）の浩さんに対する信頼や、『坊っちゃん』の下女清の坊っちゃんに対する信頼に見られた、知的には説明する事の出来ない「信頼」に回帰して行くものなのかも知れない。

（岡山大学大学院文学研究科）

### 研究室受贈図書雑誌目録 II

- 研究紀要 創刊号、第二号（尚絅学園）  
研究評論濫辞 第一、二号（立教大）  
研究報告集（国立国語研究所）  
研究論集 第六号（開成中学）  
言語文化 第十四号（一橋大）  
高知大国文 第八号  
甲南国文 第十九、二十号（甲南女子大）  
国語学研究 第十七号（東北大）  
国語学研究と資料 第三号（早大）  
国語教育 第三号（富山大）  
国語研究 第六号（九州大谷短大）  
国語国文 第一号（愛知淑徳大）  
国語国文 第十三、十四号（東海学園女子短大）

- 国語国文 第九号（宮城教育大）  
国語国文学会々誌 第二十一号（学習院大）  
国語国文学研究 第十三号（熊本大）  
国語国文学誌 第七号（広島女学院大）  
国語国文学報 第三十二、三十三集（愛知教育大）  
国語国文研究 第六十号（北海道大）  
国語国文論集 第七号（学習院女子短大）  
国語国文論集 第八号（安田女子大）  
国際日本文学研究集会々議録 第一回（国文学研究資料館）  
国文 第八号（大谷女子大）  
国文学会誌 第二十一号（新潟大）  
国文学研究 第六十四、六十五、六十六集（早稲田大）  
国文学研究資料館紀要 第四号  
国文学研究資料館報 第九、十、十一号（国文学研究資料館）  
国文学研究ノート 第九号（神戸大）  
国文学攷 第七十六、七十七、七十八、七十九、八十号（広島大）  
国文学雑誌 第二十三号（藤女子大）  
国文学論究 第五号（花園大）  
（四十頁に続く）